

寄稿

私と作業科学

県立広島大学保健福祉学部

吉川 ひろみ

Hiromi Yoshikawa

(日本作業科学研究会副会長)

私が作業科学と出会ったのは、1991年に群馬大学医療技術短期大学部で助手をしている頃に職場の抄読会で読んだ論文¹⁾だった。漠然としていたけれど、「作業を定義することに疲れた」という記載に共感した。そして作業科学を誕生させる上で作業を「chunks of daily activity the can be named in the lexicon of the culture」と定義したと知った。Chunksの意味は分かってもうまく訳せなかったし、lexiconは意味も分からなかった。Can be namedに秘められた深い意味も後で知った。

1992年にウェスタンミシガン大学に留学中の授業の課題として、作業療法に必要な学問を医学や自然科学以外に求めるべきだという論文を読んだ。具体的には文化人類学、社会学、現象学といった学問のような学び方をすることが作業療法には必要だという主張だった。Yerxaは、変数を規定して行う量的研究が誤った結論を導くと批判し、自らの実験心理学研究によってそれを知ったと述べた²⁾。

1993年に帰国し、翌年に作業療法理論について書いた時には、作業科学も人間作業モデルも類似のカテゴリーに入れていた³⁾。1995年に日本作業療法士協会全国研修会(札幌)で佐藤剛氏が作業科学(当時は作業学と表現していた)をテーマに取り上げた。プレワークショップに参加し、作業に焦点を当てて知識の体系化を試みる新しい学問としての作業科学を魅力的だと思ふようになった。Clarkのスレーグル講演録⁴⁾がわかりやすく、これまでの作業療法やリハビリテーションが、当事者の人生の一部分にしか関わっていないことにも気づいた。南カリフォルニア大学の教員や同大学主催のシンポジウムでの講演録を集めた本⁵⁾は難解だったが、職場で輪読会をして、ディスカッショントピックに沿って話した。家事作業の特性、高齢者の作業の意味づけ、作業バランスなど興味深い内容がいくつかあった。

2000年から「作業科学」と題した授業を始めた。南米の楽器サンポーニャとの偶然の出会いから、ライブや講演活動を始めた事例について書いた⁶⁾。私が初めて書いた作業科学の論文だと思う。作業をすること(doing)を通して人が何かになること(being)を実感した。この論文が発表される前に佐藤剛先生が亡くなってしまい本当に残念だった。

1997年から始まった作業科学セミナーに毎回参加した。2001年にはAnn Wilcock氏が講演し、さらに作業科学の大きさを知った。社会レベルでの貢献に気づくようになった⁷⁾。「作業療法士になってから30年間、私は作業に焦点を当て損なってきた。若い人たちに同じ経験をさせたくない」という言葉に納得した。作業療法士としての実践では、COPM(カナダ作業遂行測定)とAMPS(運動とプロセス技能評価)を使うようになっていた。COPMでクライアントの問題を探す時、「作業に名前を付けること(can be named)」の重要性がよくわかるようになった。料理、食事の用意、クッキング、炊事など、クライアントが問題としている作業を何と呼ぶかによって、意味や機能が異なる。AMPSでは、「どの辺りを一まとまりとするのか(chunks of daily activity)」、「クライアントの文化ではどんな作業なのか(in the lexicon of the culture)」を気にするようになった。食器洗いはどこまで洗っておしまいなのか、ゴミ入れやスポンジ、台もきれいするのかなど、その人によって一つの作業に含まれる活動の内容や数が異なる。所属する集団(家族や地域)によって作業の呼び方や含まれる内容が異なる。COPMとAMPSは作業療法を進めるための便利な道具でありつつ、作業科学を実際の生活の中に具現化することを可能にしていると思う。

2004年には三原で第8回作業科学セミナーを開催した。Zemke先生にはスレーグル講演の一部と、Well Elderly Studyについて話していただいた。作業科学が

作業療法をより確実な専門領域に仕立てており、作業療法を離れてさえ人々の福祉に貢献することを実感した。2005年から大学院でも作業科学を教えるようになって、「Journal of Occupational Science」を以前よりもよく読むようになった。2006年と2007年に参加した作業科学シンクタンクでは、作業科学の果てしない可能性をさらに大きく予感した。2006年12月に発足した日本作業科学研究会ではニューズレター係となり、2号まで発行した。まだまだ始まったばかりだけれど、いろいろ楽しい。

私にとって作業科学は大風呂敷だと思う。いろいろ包めるし、包んでみると違って見える。手品のように丸めた風呂敷から鳩が出てくるかもしれない。作業科学を知り、作業療法をする中で、作業の力ってすごいと思うことがよくある。いい作業に出会えたら本当に幸せだと思う。

文 献

- 1) Clark FA, Parham D, Carlson ME, Frank ME, Jackson, Pierce D, Wolfe F, Zemke R: Occupational science: Academic innovation in the service of occupational therapy's future. *Amer J Occup Ther* 45: 300-310, 1991.
- 2) Yerxa EJ: Seeking a relevant, ethical, and realistic way of knowing for occupational therapy. *Amer J Occup Ther* 45: 199-204, 1991.
- 3) 吉川ひろみ作業療法理論確立への取組み。作業療法 13: 18-23, 2004.
- 4) Clark FA: Occupation embedded in a real life: Interweaving occupational science and occupational therapy. *Amer J Occup Ther* 47: 1069-1080, 1993.
- 5) Clark F, et al (著), 佐藤 剛 (監訳) : 作業科学—作業的存在としての人間の研究。三輪書店。2000.
- 6) 吉川ひろみ, 畑間英一, 近藤敏: 楽器との出会いから広がる人生。OTジャーナル37: 119-123, 2003.
- 7) Townsend E: Occupational therapy's social vision. *Canadian J Occup Ther* 60, 174-184, 1993. (吉川ひろみ: 学びたい世界の作業療法。OTジャーナル 37: 239-242, 2003.)